



# ひよこだより

都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談

令和4年9月1日 NO. 5

## コミュニケーションで自信をつけるために

8月、NHKのあさイチという番組で、難聴児向けの総合学習塾「デフアカデミー」の様子が報道されました。「デフアカデミー」を運営しているのはNPO法人 Silent Voice 代表、尾中友哉さんですが、彼はCODA（コーダ）で、ご両親が聞こえない方の元に生まれた聴者です。彼は幼い頃から家の中では手話、外では声で話して育ってきました。父親に対しては、父らしさやリーダーシップを取ってくれる頼もしい親として見て、育ってきたのですが、高校生になった時に、父親が会社に行くのが辛そうであることを知りました。聞けば、会社の中で、声で呼ばれても聞こえないのでネジを投げて呼ばれていたとのこと。尾中さんは心が痛くなったと話されていました。父親が父らしく職場にいることや、能力を発揮するのが難しい状況にあることを知り、さらに父以外の若い



世代の聞こえない、聞こえにくい人たちも同じような状況があることを知り、聞こえる人と聞こえない人の懸け橋になれることはないかと考え、こうした塾を始めたそうです。子供たちはろう学校や地域の学校というように、様々な場で過ごしているわけですが、必ずしも子供たちに合った対応をしてもらっているとは言えないと彼は話します。実際にろう学校でも、コミュニケーション方法に手話を入れている所とそうでない所があるのも事実です。

また、聞こえない子供たちの9割が聞こえる親御さんの元に生まれているので、子供たちにとっては家庭の中でも、聴者の中で過ごす困難さがあるわけです。例えば、家族で旅行に行くことは分かっているけど当日までどこに行くか知らなかった子供の例があるそうです。このような例は他にもたくさんあるわけですが、聞こえる家族の何気なく話している会話が聞こえない子供には入ってこない、意図的に丁寧に伝える、また何気ない雑談であっても伝わるようなコミュニケーション環境を作る、こうした配慮がない限り子供たちにとって家庭が安心できる場にはならないわけですね。この子供の場合も、家族旅行の会話に参加できていれば、「自分は〇〇に行ってみよう」「飛行機に乗ったことがないから、飛行機に乗って行きたい！」というように、自分の思いや意見を伝えることができるわけです。情報が入ることで考え、伝えたい気持ちが芽生えるわけですね。小さい頃から家族の中や学校で自分の意見を伝える経験を積み重ねることが、職場で自分の意見が伝えられ、一人で問題を抱えて孤立することがなくなるのではないかと、そのためには、聞こえない子供たちが育つ上で、『コミュニケーションで安心できる場』が必要だということです。尾中さんの塾設立の意図は学習を学ぶだけでなく、通じ合う安心感、思う存分コミュニケーションができる満足感を与えるために作られたことがよくわかりました。これから番組の中で取り上げられていたテーマに沿って解説していきたいと思います。



### ●インタビュー 「聴者に対して」

A 聞こえる家族に対して（中学生女子）

「ご飯を食べている時、テレビを見ている時など家族の会話が分からないけれども、家族に聞き返すことはできない。色々ある。聞き返すのは恥ずかしい。」

B 聴者に対して（中学生男子）

「聞こえない状況で何か言われて、『ああ…うんうん』と適当に答えて、会話できない悔しい思いをした。自分に自信が持てないので、地域の習い事に行かれないと思ったり、地域のイベントに参加したくないと思ったりした。」

聞こえない子供たちと聴者の間にはやはり音声言語コミュニケーションの壁があるようです。このことは、音声で話せるようになれば解決する問題ではありません。Aさんもおそらく家族と1対1であれば通じ合えるのだと思います。しかし、家族が複数で会話を始めると誰が何を話しているのかわからなくなるわけです。聞こえがよくても、人数が増えると音声だけではわかりません。また、B君の場合も難聴を配慮してもらえない中ではわかったふりをしたり、適当にうなずいたりしてやり過ごすことになるわけですが、こうしたわからない積み重ねは、聴者が苦手で、できれば関わりたくないという気持ちに繋がることはこれまでもよく耳にしてきました。工夫すれば伝え合えることの喜びを子供たちには伝えていく必要があります。

## ●買い物体験

塾ではコミュニケーション力をつけるために色々な取り組みをしているのですが、番組では小学生男子がスタッフと一緒に駄菓子屋に買い物体験をする姿が放映されました。店員さんは高齢者でマスク使用。買う物を見せると「907円」と声だけで言われるのですがわかりません。その時に事前に書いておいたリストが役に立ちます。「買う物」「領収書が必要」「領収書の宛先」が書いてある紙を見せて、店員さんに読んでもらい、やり取りが成立。筆談で補いながら買い物体験ができました。文字で書いたメモやリストを見せたり、その場で筆談したりすることで聴者とのやり取りが成立することを経験できました。



## ●自分で企画し、実行する体験

塾では、聴者を招いての夏祭りを実施。子供たちが内容を企画し、実行することに意義があります。準備を整え、接客の場を通して自ら行動したり、話しかけたりする体験の場になりました。こうした小さな体験の積み重ねを通して、聴者とのコミュニケーションの壁を乗り越えていけることでしょうか。本校でも、コロナ感染拡大前のように葛飾祭（文化祭）が外部の方をたくさん招いて実施できるようになると、この夏祭り体験と同様に聴者と関わり、伝え合う貴重な体験の場になるので、再開できることを心待ちにしたいですね。



## ●ろうスタッフの役割

塾のスタッフは聞こえない人がほとんどだということです。子供たちにとっては「こんな風になりたい。」というロールモデルとの出会いになり、また、「聞こえる人とどんな風に接すればいいのか。」そんなノウハウを学ぶチャンスにもなっているようでした。実際に、ろうスタッフに一人旅での対処の仕方を尋ねる小学生の姿が取り上げられていましたが、ろうのスタッフが自身の経験に基づいて、「～すればできる。」「～の工夫をしてごらん。」と具体的に、可能性を込めた形で自信をもって提案してくれるので、子供たちには励みになり、安心と自信に繋がっていくようでした。

## ●子供が変わり、親が変わる



小3の女の子は重度難聴です。6人家族の中で両親、兄弟、祖母の5人は聴者で、彼女だけが聞こえません。家族の中では簡単な手話と口話で会話をしているとのことでした。塾に通う前は、両親や祖母は彼女が車の音にも気付かないから危ないと思い、すぐ近くであつても一人でお使いに行かせることはなく、過保護だったと話されていました。しかし、塾に通い始めて10カ月経った頃に、お母さんが彼女を連れて買い物に行き、お店の人に「〇〇円です。」と言われた時に、「私は聞こえないのでわかりません。」と自分から話し、持っていた500円玉を渡して「これで足りみますか？」と伝えたそうです。お母さんはびっくりして、こんなことができるんだと思ったそうです。同時に、自分が彼女を信じて色々やらせてこなかったことを反省したそうです。それからは、家族は彼女にできることを任せるようにしたそうです。お店の人とのやり取りにも慣れ、また、いつも照れて話したこともなかった行きつけの美容室でも、自分からたくさん話ができるようになり、身振りや表情を使いながら工夫して、伝えることができるようになっていきました。塾での経験を通して、できること、したいことが増えたそうです。十分通じ合える環境の中でコミュニケーションに自信がついたのでしょう。こうした子供の伝えようとする積極的な姿は、聴者にも伝わり、聴者も聞こえない子供に合わせて身振りや表情を使って、わかるようにコミュニケーションを取ってくれるようになりました。人と繋がりたい、その思いは誰もが抱くもの。相手を変えることは難しいものですが、聞こえない子供や親御さんが変わることが聴者を変えていく力になることが伝わってきました。

聴者には、聞こえない子供たちが「見てわかる子供たち」で、顔と顔、目と目を合わせてコミュニケーションをとること、手話がわからなくても身振り、手ぶり、表情で伝えることが効果的であることを丁寧に伝えていきたいですね。文字が読めるようになったら、音声を文字に変えるUDトークアプリなどを使ったり、筆談したり、携帯に文字を入力したりしながら伝え合えること、つまり見ること、見合うことでコミュニケーションが成立することを発信していきたいものですね。尾中さんが経営しているような塾のねらいは、ろう学校でも叶えていくことが可能だと思います。わかる安心感、伝え合える喜びを味わえる場でコミュニケーションに自信をつけ、その自信を元に聴者にどう関わればいいのか、小さな体験を重ねていくことが大事であることを感じました。毎日の生活の中で、買い物や習い事、お祭り等の地域のイベント等、聴者との接点を積極的にもたせていきたいものですね。それが社会に出てから伸び伸び生活できる力に繋がっていくと思います。2学期が始まりました。また聞こえないお子さんのより良い子育てと一緒に考えていきましょう。

(文責 菅原)